高知県立文化施設事業評価委員会（平成 30 年度事業） 評価表　　高知県立文学館

本県ゆかりの文学作家を顕彰し、高知の文学の魅力を伝えるとともに、県民の文学への関心を高める

要求水準－収集・保存

収集方針に基づき県関係の作家の資料を収集し、適切に保存する

評価項目
（1）作家や関係者との信頼関係を築き、特色のある資料の充実に努める
（2）資料の整理・分類、点検・劣化防止等の処置を適切に行う

状 況 説 明
・県立の施設という信用と日頃からの関係者との親交を通じて、寄贈資料は増加しており、平成 30 年度末時点で 74,361 点（前年度末から比べ 1,374 点の増加） ＜H30 年度の主な寄贈資料＞ 寺田寅彦書簡・絵画、夏目漱石書簡等 31 点、大岡昇平書簡 14 点、 高野素十他高浜虚子門下俳人らの短冊 10 点　等 1）体制の確保 ・資料班の契約職員２名が取り組んでおり、着実に資料整理、保存を進めている。 2）展示保存の技術・意識の向上 ・26 年度より博物館クラウド（I.B.MUSEUM SaaS)を導入し、資料の管理をデジタル化。館全体で情報を共有する体制を整備し、資料の有効活用を進めている。 ・資料の適正な保管及び展示のため、収蔵庫や展示室内の温湿度データを収集・分析し、館内で情報共有するなど、各部署が連携しながら適切な環境の維持に努めている。 ・26 年度から取り組んでいる、有害虫駆除の予防策（IPM）の活動を継続し、職員全員が交代で毎日開館前の点検を行うことで、展示環境保全に関する意識を高めるとともに実質的な成果も出ている。 ・定期的に収蔵庫の燻蒸を行うとともに、展示室内照明の一部LED化も行った。 3）資料の整理・管理 ・新規資料や未登録資料の登録及び情報の補完等の更新作業を実施。一部資料について、ホームページを通じてデータベースを公開した。 新規登録　1，374点　更新資料　15，642点

評価	理 由
A	・作家や関係者と良好な関係を維持し、資料の寄贈・寄託につなげており、平時の地道な積み重ねが成果として表れている。 ・良好な保存・展示環境を作ることでリスクを軽減するという活動に取り組んでおり、常に保存・展示環境に気を配る習慣を身につける努力が認められる。

要求水準－調査・研究
高知の文学や作家について研究を進め、その成果を公開する

評価項目
（1）職員の専門性の向上を図るとともに、高知の文学や作家に関する調査研究を進める
（2）研究活動の成果を、企画展や広報媒体などを活用し、広く公表する

状 況 説 明
1）所蔵資料の調査研究 ・所蔵資料を体系的に分類・整理し、常設展示室での顕彰作家のローテーション展示紹介の基礎研究資料となっている。 ・高知県が推進する幕末維新博の地域会場として、常設展を中心に歴史と文学をテーマとする展示行った。 2）県内外の文学館施設の交流 ・全国文学館協議会、瀬戸内文学館連絡協議会、ミュージアムネットワーク等へ参加し、県内外の文学館施設との交流を通じて、情報交換や専門性の向上に寄与する活動を行っている。 3）常設展における公開 ・大原富枝・田中貢太郎・浜田波静を紹介し、高知の文学者と作品の魅力をわかりやすく伝えた。 4）企画展 ・高知県ゆかりの作家を顕彰し紹介する企画展を3本行った。 5）文学研究誌等への寄稿や講演 ・同人俳誌「勾玉」での「高知の俳人・若尾瀾水」の連載や、文学学校、シルバー大学、高知大学で講義を行った。

評価	理 由
A	・所蔵資料の調査研究に継続して取り組み、成果報告として、顕彰作家のローテーション展示や幕末維新博の地域会場として、歴史と文学をテーマとする展示を行っている。 ・県内外の文学館施設と交流し、情報交換や専門性の向上に寄与する活動を継続して行っていることが評価できる。 ・文学学校、シルバー大学、高知大学で講義を行うなど、より多くの県民へ文学の魅力を広めることができている。

要求水準－展示･公開
優れた文学作品に触れる機会を提供し、文学の愉しさを伝える

評価項目
（1）新鮮さと変化が感じられる常設展示や、時代の変化を踏まえ、様々な年代の知的好奇心に触れる企画展示を行い、5年間で 10 万人以上の観覧者を目指す
（2）次代を担う子どもたちに喜びと感動を与え、創造性豊かな心を育む企画展示を行う
（3）ギャラリートークの実施など、来館者の理解が深まる取り組みを行う

状 況 説 明
1）常設展示室 ・ローテーション方式での展示の入替や、宮尾文学の世界では、『宮尾登美子の軌跡』の展示を行った 2）企画展示室 ・幕末維新博関連企画として「幕末維新の文学と歴史展」と題し、文学と歴史の違いや作家の歴史観の違いなどを1年間通して紹介。 ・「池田あきこ原画展」（5,180 人）、「宮西達也 New ワンダーランド展」（6,159 人）、「寅彦先生に学ぶ天災展」（2,154 人）、「江戸川乱歩の華麗なる本棚」（6,947 人）、「安岡章太郎展」（1,735 人） 3）子どもの創造性豊かな心を育む取組 ・「宮西達也 New ワンダーランド展」では、代表作や新作の絵本原画を中心に展示。「テレビ高知コラボルーム」も設置し、幅広い世代が楽しめる展示を行った。 ・「江戸川乱歩の華麗なる本棚」では、アクションマンガ『文豪ストレイドッグス』の物語世界を紹介しつつ、江戸川乱歩を中心に高知との意外なつながりを美麗なビジュアルで親しみやすく紹介し、若い世代へ、今までとはひと味違った文学の魅力や楽しさを伝える展示を行った。 ・「おはなしキャラバン」による読み聴かせ活動の実施。（実績：49回　2,754名参加） 4）来館者の理解を深める取組 ・企画展開催中は、毎週土曜日に担当学芸員によるギャラリートークを実施。（69回　1,070名参加） ・年間を通じて、団体等の来館にあわせて担当者による展示解説を実施。 ・展覧会では関連企画として、本人や研究者等の講演会、対談、DVD 等映像での解説を実施。 ・藤並の森を舞台に、県内の音楽アーティストによる“木洩れ日コンサート”実施。季節の風や小鳥のさえずりを感じることのできるの自然環境を舞台に、展覧会の内容を盛り込み開催した。

評価	理 由
A	・高知県の文学作家の顕彰を中心に、様々な年齢層を対象にした質の高い展覧会を実施しており、企画展観覧者数は 22,175 人（対前年度 110%）と、年間目標値である 20,500 人を達成した。 ・子どもに関心の高い企画展等を実施することで、子どもたちが文学に興味を持ち、文学館に訪れるきっかけを作ることができている。 ・ギャラリートークや解説、関連企画等を積極的に実施し、見るだけでは伝わらない担当者の思いや作品の背景を伝えることにより、来館者の理解が深まる取り組みを行っている。

要求水準－教育・普及
様々な年代を対象とした教育・普及活動を行う

評価項目
（1）多彩な年代に応じた教育プログラムの実施により、来館者の文学への関心を高める
（2）文学活動に取り組む団体や個人の活動を支援し、文学活動の裾野を拡げる

状 況 説 明
・県民に親しまれる文学館を目指し、様々なテーマで教育活動を展開した。 ・文学マイスター講座（年９回）では、寺田寅彦にスポットを当て、各分野に造詣の深い講師による専門的な講義を実施。全 9 回を受講した 10 名を寺田寅彦マイスターに認定し、2 名の受講生の感想文を館報に掲載。 ・児童生徒文学作品朗読コンクールでは、特別審査員に 児童文学者・横山充男氏を招き、「ことばは生きている」と題して記念講演会を行い、子どもたちの学びの場とした。 ・市民講座・生涯大学等への講師依頼を受けて館の職員が出前講座を実施。 ・児童クラブや福祉施設などからの要請を受けての出張おはなしキャラバンや出張朗読を実施。 ・企画展開催中の土曜日には展示解説を行うとともに、年間を通じて定期的に教育普及事業を実施。（第１：おはなしキャラバン、第２：語りと紙芝居の会定例会、第３：朗読の会、第４：文学マイスター講座） ・博物館実習、小中高や専門学校、大学等の授業と関連した団体鑑賞を例年受け入れいている。 ・「朗読の会」はお客様の前での発表の場を月１回設けて実践経験も積み、会員のスキルを高めている。 ・市原麟一郎さんを中心に語りや紙芝居の演じ方を学ぶ定例会を毎月行い、会員による発表の場も設けている。 ・古文書読解の上級者を会員として、当館所蔵の近世文学資料により「近世土佐文学研究会」を当館で週一回行い、サークルを支援するとともに、当館所蔵の近世文学資料の調査研究にも役立てている。

評価	理 由
A	・文学マイスター講座や児童生徒文学作品朗読コンクールの開催をはじめ、職員の講師派遣やおはなしキャラバン等のアウトリーチ活動を積極的に展開するなど、多彩な教育プログラムが実施されている。 ・朗読の会の会員スキルの向上や、文学研究会への館所蔵資料の提供などにより、文学活動に取り組む団体や個人の活動支援が行われたと認められる。

要求水準－広報

評価項目
高知の文学に関する戦略的な情報発信により、県内外に館の魅力を広める

状 況 説 明
1）広報媒体の活用 ・新聞･テレビ･ラジオや各種情報誌などへ積極的な情報提供を行い、タイムリーな情報発信を行った。 ・ポスター・チラシの配布にあたっては、高知市内、県内の道の駅などにも出向いて依頼し、広報密度を高めている。 ・大学の研究誌や新聞の学芸欄等への連載など、紙面を通して情報発信を行った。 ・最新情報を随時ホームページで情報発信しており、また、ツイッターやフェイスブックなどのSNSも活用し、幅広い層への情報提供を行った。 ・企画展「江戸川乱歩の華麗なる本棚」では、近隣3施設と連携した初めての周遊企画を実施し、相互に PR を行った。 2）講演会への職員派遣 ・市民生涯大学・シルバー大学・教育関係者研修会や高知大学等において講師を務め、 高知県の文学全般や展覧会のことなどを広く伝えた。

評価	理 由
A	・各種広報媒体を利用して企画展等の情報を発信し、ホームページの活用なども含め、積極的で戦略的な広報活動が行われている。 ・近隣3施設と連携した PR を行い、新たな客層の取り込みを図った。 ・講演会などを通じて、高知の文学について、広く伝える取り組みが行われていると認められる。

要求水準ーその他

評価項目
県内外の他の博物館等と連携した事業の充実により、県民サービスの向上を図る

状 況 説 明
1）文学館・博物館との連携 ・各企画展において、関係する県外の文化施設（文学館、図書館、博物館等々）との展示構成における資料の貸し借りや情報交換を行い、高知県所有資料だけでなく、県外文化施設の所有資料も展示することができている。 ・「全国文学館協議会」や「瀬戸内文学館連絡協議会」へ加入し、情報交換や意見交換により、日頃から関係を深め、展覧会等での協力体制の円滑化や強化に努めた。 ・全国文学館協議会共同企画「3.11　文学館からのメッセージ」に参加し、「寺田寅彦と地震Ⅵ・Ⅶ」として、安政南海地震や関東大震災など、高知の作家が向き合った地震について触れた作品を中心に展示した。 ・こうちミュージアムネットワークに加入し、県内の文化施設との連携や情報共有に努めた。 ・高知お城下文化施設の会へも参加し、県内施設との情報共有を行った。 2）その他の連携 ・子ども企画などを扱っている民間会社などとの情報交換を密にし、時代のニーズや各社の企画などの情報の入手に努めた。 ・「寅彦先生に学ぶ天災展」では、高知コア研究所の協力の元、県内の地震津波碑を紹介。 ・高知県の防災教育拠点校の清水中、竹島小、入野小、江ノ口小、白木谷小、久礼田小、元小より成果品を借りて展示した。

評価	理 由
A	・全国の文学館組織や文化施設等との連携を図り、より魅力ある企画展の開催や巡回展の誘致につなげている。 ・「高知お城下文化施設の会」での活動を行うなど、分野を超えた連携を積極的に行っている。 ・「寅彦先生に学ぶ天災展」では、高知コア研究所との協力や県の防災教育拠点校との連携により、展示の充実が図られた。

要求水準－施設管理
施設及び設備の適切な保守管理をとおして、故障や事故のない運営を行う

評価項目		
（1）適切な管理運営の確保	社会的責任	・法令等の遵守　・個人情報、情報公開の状況
	建物や設備の管理	・点検、修繕の実績　・業務委託の状況
	危機管理	・風水害、火災、地震、盗難等危機管理対策 ・マニュアルの作成　・職員研修

状 況 説 明
1）社会的責任 ・公益財団法人高知県文化財団の各種規程により、法令を遵守した管理運営を行っている。 2）建物や設備の管理 ＜主な修繕等の実績＞ ・空調ACUユニット交換 ・茶室「慶雲庵」天井わら吹き替え ・茶室「慶雲庵」北庭砕石敷き ・消防設備修理・交換 ・藤並の森危険木伐採・撤去 ・藤並の森及び茶室「慶雲庵」の植栽管理 ・館内LAN更新 ・収蔵庫燻蒸 ・収蔵庫加湿器（1～3）消耗品交換 ・館長室パーティション設置　・ ・常設展示室・ホール・事務室等 LED 交換 ・館施設の保守管理・点検は、空調・電気・清掃・機械設備等を中心に、入札等で選定した業者に委託して行っている。 3）危機管理 ・風水害、地震、火災等の危機管理については、防火管理者を選定し、対応マニュアルに沿い管理している。 ・安否確認や緊急連絡網、緊急時の行動、役割分担などを記載した緊急対応ポケットカードを作成し、全職員に配布し、自分の対応等の把握に努め、訓練を実施して、万一に備えている。

評価	理 由
A	・建物・設備の管理については、事前に修理を行い、観覧者の安全性や快適性を保つ等、適切な管理運営が遂行されたと認められる。

評価項目	
（2）利用者サービスの維持向上	・利用者の意見の反映　自己点検、評価の状況　・事故、クレームへの対応 ・職員の専門性の向上　・研修の実施状況　・その他サービス向上の取り組み

状 況 説 明
1）利用者の意見の反映 ・アンケート調査や直接職員が受けた意見等を全職員で共有し、様々な年齢層の方に満足していただける企画開催をはじめ、サービス向上のための基礎資料として活用し、良好な施設づくりに取り組んだ。 2）自己点検 ・毎月の定例会において、職員が事業運営や職員活動に対する様々な意見を出し合い、サービス向上のための改善に取り組んだ。 3）職員の専門性の向上と研修の実施状況 ・全国文学館協議会や瀬戸内文学館連絡協議会での専門研修や文化庁主催の「博物館学芸員専門講座」など各種研修会に積極的に参加し、それぞれの専門分野の知識向上スキルアップに努めた。 ・県外の展覧会視察や民間の展示方法等の研究により発想力を研鑽し企画展や催事を行い、顧客サービスの改善に努めた。

評価	理 由
B	・来館者アンケートの実施により、利用者サービスの維持向上に努めている。 ・職員の専門性の向上により、展示環境改善へ繋がっている。

評価項目		
（3）利用実績	利用実績の状況	・利用状況の分析

状 況 説 明
1）利用実績の状況 ・開館日数　356 日　うち企画展開催日数 292 日（H29 実績　353 日　うち企画展開催日数 296 日） ・総利用者数　51,628 人（H29 実績 43,998 人　対前年度比 117%） うち常設展観覧者数 2,193 人（H29 実績 1,972 人　対前年度比 111%） うち企画展観覧者数 22,175 人（H29 実績 20,083 人　対前年度比 110%） うち教育普及事業参加者数 15,817 人（H29 実績 11,843 人　対前年度比 133%） うちホール・茶室利用者数 11,443 人（H29 実績 10,100 人　対前年度比 113%） 2）開催状況 （企画展） オリジナル展３本、巡回展２本を開催し、ゆかりの作家や郷土を舞台とした作品、子どもたちに人気のある作品、全国的に人気の高い作品を題材に幅広い内容で開催した。 （常設展、企画コーナー、特別室） 常設展示室では、収蔵資料を中心にローテーション方式で入れ替えを行い、企画コーナーでは幕末維新博関連企画として「幕末維新の文学と歴史展」と題し、文学と歴史の違いや作家の歴史観の違いなどを年間通して紹介、「しおりちゃんと学ぼう！土佐近世文人～南学と詩歌の世界」展を開催。特別室「寺田寅彦室」では全国文学館協議会共同企画「3.11　文学館からのメッセージ」に参加し、「寺田寅彦と地震Ｖ―安政地震と土佐」を開催、「宮尾文学室」では「宮尾登美子の軌跡」をテーマに三部構成で展示した。

評価	理 由
A	・総利用者数、企画展観覧者数が増加しており、企画展観覧者数は目標観覧者数の 20,500 人を上回っている。

評価項目		
（4）収支の状況	経営努力	・収入増加の取り組み　・経費削減の取り組み

状 況 説 明
1）収入増加の取組 ・「優良な企画展の開催といつ来ても新鮮な常設展」を合い言葉に、観覧者の来館推進を図った。 ・ミュージアムショップにおいても企画展と連動したグッズの制作販売を行い、販売促進を行った。 2）経費削減の取組 ・経費の中で一番大きなウエイトを占める電気料の削減について、不用な部分のこまめな消灯、空調機器の一斉稼働の防止（デマンド上昇の回避）、展示室・ホール・事務室等の LED 化等により、消費電力の削減を図った。 ・消耗品の在庫見直しによる無駄な購入の防止、コピー機・印刷機の有効活用による使用料削減等を行った。 ・展示物のキャプションやデザイン等を自作することにより委託料や印刷費の削減を行った。

評価	理 由
A	ミュージアムショップの商品販売や、展示物等の職員の自作など、工夫を凝らした取組の努力が認められる。

総合評価

評価	理　由
A	・常設展示の計画的充実や、魅力ある企画展の開催、データ分析に基づいた戦略的情報発信など、日ごろからの地道な取り組みが評価できる。 ・企画展観覧者数の年間目標である 20,500 人を達成している。 ・職員が事業運営や職員活動に対する様々な意見を出し合い、サービス向上のための改善に取り組んでおり、優れた管理運営、事業の遂行がされたと認められる。 以上のことから、要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされたと認められる。

評価基準

「A」 要求水準を上回る成果があり、優れた管理運営・事業の遂行がされた。
「B」 概ね要求水準どおりであり、適正な管理運営・事業の遂行がされた。
「C」 要求水準に達しない面があり、改善のための工夫や努力が必要。
「D」 管理運営・事業の遂行が適正に行われたとはいえず、大いに改善を要する。